ある時、御家の後見、石岡主典・松田・小野寺・加賀太夫、御前に召され、いかに方々この度、九郎愛吉こそ我を恨み、兵庫守を語らい、浦の城へ引き入れ今専らに軍勢催促、軍評定と聞きてあり、しかれば出羽一国所々の大将へ組すべき由、使者をもって頼むと聞く、左あるにおいては誰か先年太郎殿の御恩ならぬ者なければ、大方彼に組せんは治定なり、この儀いかに、と仰せける。

人々承り、これは大事の御事なり、さりながら兵庫守が分際にて何程の事か候べき、誠に海上の月を取らんとて猿猴が手を指すに似たり、蟷螂が斧をもって立ち車に向かうが如し、しかし手延びにしては悪しかりなん、急に取りかけしかるべく存じ奉る、と申し上げれば、愛季聞こし召し、我も左こそ思うなり、しかしながら所々の大勢集まり取っかけられては、この平城にて叶うまじ、一先湊を開き、男鹿の城に楯籠るべし、もしまた事大切に及びなば檜山切山の城に籠るべし、左あらば九郎が勢、千騎万騎にて寄するとも容易落つべき城にてなし、愛季自然の事あらばこの城に籠るべしと思うなり、先、男鹿の城に引くべし、何れもその用意仕り候え、と仰せ出されける。各々畏みて思い思いに出立ちける。

愛季御秘蔵の黒鴨毛という御馬を舎人に牽かせ橋黒煤張の鞍おかせ、橋金地の鎧に白磨の轡、大形鞦、細筋の手縄、鞭差縄など華やかに出で立たせ、後より続け者ども、と真先かけて出で給えば、天晴御大将や、と感じける。御供の人々には石岡主典・松野・小野寺・加賀太夫・湊修理・



北条主馬・片岡伝内左衛門・大平上総守・安東右京正氏をはじめとして思い思いに出で立ちて、男鹿の城へと急ぎける。そのほか、所々軍勢馳せ集まり、都合その勢二千余騎、空堀掘らせ乱杭（虎茂人）さかもぎ引かせて立て籠り給う。

これはさておき、男鹿の島の者ども、鵜木の一族・箱井の一族・北浦の一族、所々の軍兵馳せ参る者、二千五百騎ほど男鹿の城へ立て籠り、寄せ来る敵を今や今やと待ちにける。

## 仙北戸沢能登守殿、並びに所々軍兵湊へ馳せ集まる事

しかるほどに、橋本丹波守、件の廻状、首にかけて一々触れてぞ廻りける。何れも実季公の御恩蒙りし面々なれば畏み入り、参上申すべき段各々連判すえにける。

これはさておき兵庫守盛長は、城之助殿湊を開き男鹿へ引き取る由聞くよりも、これは幸いの仕合せなり、急ぎ湊へ移らんとて何れも御供仕り湊の城に御入りあり。

かかる所に橋本丹波守急ぎはせ帰り、人々一味の次第を申し上げ、件の連判状を指し出す。愛吉大悦限りなし。中にも仙北戸沢能登守殿、愛吉殿に内縁の人なれば、この度愛吉反逆と聞き給いて加勢のため大勢引き具し湊をさして下り給う。そのほか湊へ馳せ参る人々には、泉高清水の城代八柳長門守・五十目采女正定泰・馬場目玄蕃亮泰時・新庄石見守・大川七郎・橋本民部・三枝・造